

解 説

1

われわれの本格的な西夏語研究は、中央研究院歴史語言研究所（台湾）からAA研の客員教授として、龔煌城教授をお招きした1991年9月に始まり、1996年には寧夏社会科学院から、李範文教授もお招きしている。そしてこの度、1998年9月から、中国社会科学院民族研究所の研究員で、同院西夏文化研究センター主任の史金波教授にお越しいただけたことは、われわれの西夏語研究を推進する上で、この上ない好機となった。この1年にわたる日本滞在の間に教授は『俄藏黑水城文献』に収録されている《文海宝韻》の校勘と解説を成し遂げられ、われわれも教えていただく傍ら、世界に先駆けて開発した西夏文字電算機処理技術によって、これを支援することが出来た。

だが、われわれはこの一連の西夏語共同研究を通し、最先端の西夏語文献解説も重要だが、西夏語研究そのもののすそ野を広げるような、基礎的な西夏語文献整理もまた一方で重要であることを痛感させられた。そこで、ちょうど史金波教授と行う‘写本’である《文海宝韻》の研究と平行して、われわれだけでその‘刻本’である《文海》の研究も開始したのであった。

今回われわれが特に急務の研究と感じたのは、《文海》における西夏文字の字形と音韻の反切の記述であった。というのは、史金波教授と行う《文海宝韻》が予想外に困難を窮めたからである。すなわち、《文海宝韻》が本来《文海》に欠落していた上声・入声を補うはずのものであるのに、西夏文字に対する西夏語による解説部分を欠き、頼りは所々に記されている字形と音韻の反切のみ、しかしこれも草書体である上に書影もまた非常に不鮮明だったので、この《文海宝韻》をまた《文海》で補うという作業になってしまったのである。

2

かくして《文海》における反切法の研究を始めたわれわれであったが、今度はまた別の必要にも迫られた。それは、この作業を通して確認された西夏文字の字形が、われわれがここ数年来気づいていてもその修正を行って来なかったAA研開発の字形と、やはりどうしても食い違い、もはや我慢できなくなったのである。このためついには、かなりの西夏文字をカバーする《文海宝韻》の出版という課題とも重なって、本格的なAA研西夏文字の整形も開始せざるを得なくなった。しかしこの西夏六千文字を博物学的に網羅・観察し、“西夏文字の理想型を追求する”という基本作業が、実はこれまでの西夏文字研究においては一番欠けていた大切な分野ではなかっただろうか。そして、この“西夏文字の文字管理”というシステムこそ、この文明の利器である大型電算機を利用することによって初めて実現するものではなからうかと思う。

さてここで、われわれの研究内容をご紹介しますと同時に、《文海》がどんな本であるかを少し説明しておきたい。

3-1 全体の構成

全体の構成は《文海宝韻》から推測すると、下記のようなになる。なお、現存するものは上声・入声のすべてが欠けている他にも、部分的に欠落している。

①平声

1 韻～9 7 韻 (一部欠落…… 35 韻の後半、36 韻の前半)

②上声・入声

1 韻～8 6 韻 (完全に欠落)

③雑類

平声

重唇音 (欠落)

軽唇音 (欠落)

舌頭音 (一部欠落)

舌上音

牙音

齒頭音

正齒音

喉音

来日舌齒音

上声・入声

重唇音 (欠落)

軽唇音 (欠落)

舌頭音 (欠落)

舌上音 (欠落)

牙音 (一部欠落)

齒頭音

正齒音

喉音

来日舌齒音 (一部欠落)

①は韻母の順で、それぞれの内部はほぼ声母の順、③は声母の順で、それぞれの内部はほぼ韻母の順となっている。

①②は、ちょうど【(すみ付き括弧)】のような切り替えマークを入れた後、韻ごとにそれぞれの韻母の代表字を立てる。そのすぐ下には第何韻であるかを表す数を記す。同韻の内部ではさらに、声による切り替えを表す○のマークを入れる。

見開きページは片面7行で、一行には見出し語で1～3語が入る。右の行から左の行、上から下へと読み下す。A面とB面の中間には、上部に書名《文海》と平声の「平」の西夏文字が入る。ここが雑類では「雑類」になる。



B 面

A 面

7	6	5	4	3	2	1	文 海 平	7	6	5	4	3	2	1
							ペ ー ジ							

下部にはページが西夏数字で入る。西夏数字は

1	𐽀	2	𐽁	3	𐽂	4	𐽃	5	𐽄
6	𐽅	7	𐽆	8	𐽇	9	𐽈	10	𐽉
11	𐽊	12	𐽋	13	𐽌	14	𐽍	15	𐽎
16	𐽏	17	𐽐	18	𐽑	19	𐽒	20	𐽓

(以下省略)

ページは雑類も、新たに1から振り直されているところからすると、平声、上声・入声、雑類でそれぞれ別々のページ付けが施されていたようだ。

3-3 一文字の構成

一文字の構成は、見出し語となる大きい西夏文字を、一文字まず立て、そのすぐ下には小さい西夏文字4文字で字形の反切が説かれ、その下に小さい西夏語による解説または同義語が2行付き、そして最後に小さい西夏文字で音韻の反切が説かれる、という具合である。平声の最初の文字を例としてあげる。

𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

𐽉𐽉𐽉𐽉

<姓>

見出し語

〔布〕の左

字形の反切

③①

〔丙〕の右

④②の順に読む

<姓>は族姓の字である。
また天子が与えて
頒えて言うものである。

見出し語に対する解説
または同義語など

右列、左列の順
に読む

〔北〕(声母)と〔路〕(韻母)
の反切で、以下4文字同様

音韻の反切

③①

④②の順に読む

2行にまたがる場合は先の行を全部読んでしまい、次の行に移るという読み方をする。
例えば次のようである。

		④③	
			夏
			②①

3-3-1 字形の反切

このうちまず、字形の反切についてだが、ここは必ず4文字になっている。組み合わせとしては、①文字+②その(①の)位置+③文字+④その(③の)位置 と来るのが一般的だが、

①文字+②その(①の)位置+③文字+④文字

①文字+②文字+③その(②の)位置+④文字

①文字+②文字+③文字+④その(③の)位置

①文字+②文字+③文字+④文字

もある。

また、全く別の解説の仕方もある。例えば、

平声85ページB面3行2番目の西夏文字 𐵑 は、

𐵑	𐵒	𐵓	𐵔
「～」	「から」	「上を」	「除く」

雑類15ページA面7行2番目の西夏文字 𐵕 は、

𐵕	𐵖	𐵗	𐵘
「～」	「から」	「～(の左)を」	「除く」

平声60ページB面1行2番目の西夏文字 𐵙 は、

𐵙	𐵚	𐵛	𐵜
「～」	「から」	「にんべんを」	「除く」

平声73ページA面1行1番目の西夏文字 𐵝 は、

𐵝	𐵞	𐵟	𐵠
「～の」	「繞」	「中」	「水」

平声 16 ページ B 面 2 行 2 番目の西夏文字  は、

   
「～」 「の」 「右」 「である」

平声 51 ページ A 面 4 行 1 番目の西夏文字  は、

  
「～の」 「文字の」 「(左右)を交換する」

平声 27 ページ B 面 7 行 2 番目の西夏文字  は、

   
「2つの」 「～(の左)、および」 「～の」 「中」

特に変わったところでは、

平声 32 ページ B 面 3 行 1 番目の西夏文字  は、

   
「～(の左)を」 「貫く」 「～の」 「右」

平声 20 ページ A 面 7 行 2 番目の西夏文字  は、

   
「～」 「と」 「同じ」 「形」

この場合“同じ形”を、‘異体字’とするよりは、‘同義文字’あるいは‘変形文字’と解釈したがよさそうだ。

時に、“必ず”4文字という己が作った規範に背かんだための、単純な字形を説明するためにわざわざ複雑な字形を持ってくる、という苦しい組み合わせも見受けられ、何かほほえましい感じさえる。例えば、

平声 80 ページ A 面 7 行 3 番目の西夏文字  は、 の下、 の下

平声 84 ページ A 面 5 行 2 番目の西夏文字  は、 の右、 の下

としているが、これは見出しの西夏文字が、本来元にすべき2つの西夏文字の反切から成り立っておらず、逆にこれらの2つの西夏文字の反切の1つになっている。

そうかと思えば反面、実用的だったり、非常に哲学的だったりする反切もある。例えば、

平声 87 ページ B 面 7 行 1 番目の西夏文字  は、 の圈、 の右、 の左とも受け取れるが、もしこのままでは、反切に示した文字の順序が逆だ。しかし、見出し語の  には「四」、反切の2文字にはそれぞれ、 「数字」、 「四」の意味があることに気付けば、意味の方を優先させたことが納得できる。

雑類 15 ページ A 面 1 行 2 番目の西夏文字  は、 の右、 、 、

とあるが、字形の説明ならば、「𐵑の右」だけで充分である。しかし、この𐵑は「囲む」、𐵑は「溝」、そして見出し語の𐵑は「牧場」であり、溝を掘ってそこに水を流し、家畜の飲み水としたのか、あるいは家畜が逃げないように囲い込む溝を表したのか、とにかく「牧場」を示していることがうかがえる。

平声70ページA面7行1番目の西夏文字𐵑は、𐵑、𐵑、𐵑、𐵑の全、とあるが、𐵑が見出し語の頭と下の間にある𐵑の形に当たるのかどうかは疑問である。この文字は「用いる」という意味を持つので、“字形の反切4文字”の原則に沿った、単なるつじつま合わせであろうか。

平声22ページB面1行2番目の西夏文字𐵑は「仏」の意味で、その字形の反切では

𐵑	𐵑	𐵑	𐵑
「人」	「三」	「界」	「貫く」

すなわち「仏は、三界を貫く人」と読みとれるが、同時に見出し語の西夏文字の右半分は、ちょうど3本の横棒を、縦棒で貫いた形になっている。

平声60ページA面6行1番目の西夏文字𐵑「教える」は、

𐵑	𐵑	𐵑	𐵑
「～の」	「右」	「～（の左）を」	「加える」

とあるが、同時に

𐵑	𐵑
「意を」	「入れる」

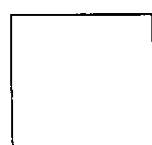
とも読みとれる。

われわれはこれらのデータを、

《文海》での 収録アドレス	西夏文字 [AA 研コード]	=	西夏文字 [AA 研コード]位置	+	西夏文字 [AA 研コード]位置
あるいは	《文海》での 収録アドレス	西夏文字 [AA 研コード]	=	西夏文字 [AA 研コード]位置	- 西夏文字 [AA 研コード]位置

の形式で入力していった。

その際、西夏文字の位置についてわれわれは、以下のような記号を用いて整理した。

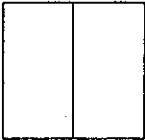
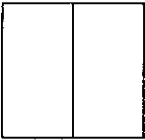
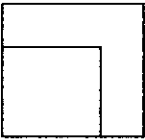
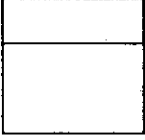
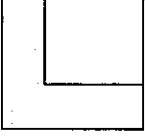


A

(all)

全

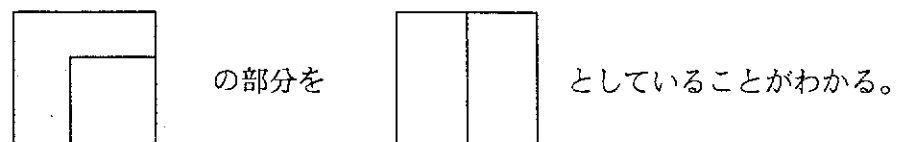
𐵑

	L (left)	左	𐵓
	R (right)	右	𐵔
	F (frame)	圈	𐵕
	C (centre)	中	𐵖
	H (head)	頭	𐵗
	B (bottom)	下	𐵘
	E (enclosure)	繞	𐵙

なお、この《文海》の中で実際に位置の明記がある場合は、英字の大文字で表記し、実際に明記されていないものでも、われわれがそれに倣って英字の小文字で位置を表しておくこととした。

しかし、この“倣って”が思いのほか難しく、例えば

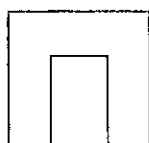
雑類13ページB面1行1番目の西夏文字 𐵓 𐵔 は、𐵔 の右、𐵖 の左とあるが、この「左」は、



平声5 2 ページB面5行2番目の西夏文字 𐵇 は、𐵈 の圈、𐵉 の左とあるが、この「圈」は、



の部分



として使っている。

また、

平声3 7 ページA面6行2番目の西夏文字 𐵇 は、𐵈 の頭、𐵉 の下としているのに対し、

平声4 8 ページB面5行2番目の西夏文字 𐵇 は、𐵈 の左、𐵉 の右としていて、右下の部品を使っているという同じ条件であるのに、なぜ片方では下、といい、もう片方では右としているのか。もっとわからないのが、

平声9 2 ページA面3行2番目の西夏文字 𐵇 は、𐵈 の圈、𐵉 の下としていて、どう見ても「圈」ではない中身を使っているではないか。

こんなふうにならわかれは、しばらく理解に苦しんだのち、ようやくあることに気が付いた。西夏文字の字形の反切において、例えば

西夏文字ア = 西夏文字イ R + 西夏文字ウ L

いうとき、たいていの場合は、

西夏文字ア = 西夏文字イの右と、西夏文字ウの左（を使って、作る）

と解釈できるのだが、中には（こちらの方が数が少ないが）、

西夏文字ア = 西夏文字イ（のX部分）を右とし、

西夏文字ウ（のX部分）を左とする

とも受け取られるものがあるということである。

その原因が

i. 単なる間違いなのか、

あるいは

ii. 始め前者の書き方で書いていて、ときどき後者が混じったのか、

iii. 始め後者のつもりで書いていたものを、前者にあらため、直し忘れたのか、

はたまた

iv. 前者の書き方で書いた人（原案を書いた人）と、後者の書き方で書いた人（それを校正した）は別人だったのか ……

とにかく、何の下書もなく、いきなりこれを書いたとも考えにくいほど、よく計算されて書かれたものであることだけは確かなので、われわれはすぐには結論を出さず、ここはひとまず「位置」という言葉で逃げておくことにした。

ちなみに《文海宝韻》では、もともと字形の反切に関わる記述が少ない上に、たとえあったとしても、たいてい出来過ぎくらいに意味の反切になっていたり、中には見出し語にした西夏文字をそのまま使ってしまう箇所があるなど、かなりの割合で、写本を行った人物の“思いつき”が入っている。

なお、これを書いた西夏人の間違いだと思われるものもあるが、上記の理由からそのままにしておいた。

平声 58 ページ A 面 5 行 2 番目の西夏文字 𐵇𐵆 は、𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の左とあるが、𐵇𐵆 の右が正しいと思われる。

平声 77 ページ B 面 6 行 2 番目の西夏文字 𐵇𐵆 は、𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の左とあるが、𐵇𐵆 の圈が正しいと思われる。

平声 9 ページ B 面 7 行 2 番目の西夏文字 𐵇𐵆 は、𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の右としてあるようだが、不鮮明でなので、あるいは正しくは 𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の圈であるかもしれない。

そのほかの、字形の反切に関する問題点いくつか以下に挙げておくと、

◆西夏語の反切の順序の間違い

平声 24 ページ B 面 4 行 1 番目の西夏文字 𐵇𐵆 は、𐵇𐵆 の頭、𐵇𐵆 の下とあるが、順序が逆になっている。これはなぜなのか不明である。

◆西夏語の見出し語の間違い

平声 83 ページ B 面 5 行 1 番目の西夏文字 𐵇𐵆

平声 84 ページ B 面 3 行 2 番目の西夏文字 𐵇𐵆

は同じ字形になってしまっているが、後者の方は 𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の右としているところから、本来 𐵇𐵆 という文字のはずだったことがわかる。

◆見出し語の西夏語の字形と反切の西夏語の字形のズレ

平声 82 ページ B 面 1 行 1 番目の西夏文字 𐵇𐵆 は、𐵇𐵆 の左、𐵇𐵆 の右としているが、前者の字形と見出し語の字形とが合わない。ちなみに《文海宝韻》ではここを 𐵇𐵆 の左としている。

3-3-2 解説または同義語

次の、西夏語による見出し西夏文字に対する解説または同義語の部分は、西夏語-西夏語字典にあたるので、もっとじっくり取り組む必要があると判断し、今回は見送ることとした。

3-3-3 音韻の反切

最後の音韻の反切については、ほとんどの場合、
西夏文字ア=西夏文字イ（の声母（子音））+西夏文字ウ（の韻母（母音））、あるいは、この後に（反）切と数字（この文字を含めて以下何字）が続く。この「切何文字」に関しての疑問が生じたのは、3箇所だった。

平声 24 ページ B 面 7 行 2 番目の文字 𐵑 「切 3」とあるが「切 2」の誤り

平声 91 ページ A 面 5 行 2 番目の文字 𐵒 「切 2」とすべきところ、記述なし

雑類 9 ページ A 面 4 行 2 番目の文字 𐵓 「切 3」とすべきなのか。
あるいは「切 1」と「切 2」なのか。
今回われわれは「切 3」ととらえた。
ちなみに史金波教授は今回の《文海宝韻》の研究において、これら 3 文字に対し、それぞれ別の漢字音を当てられる。

われわれのデータ入力形式は、

《文海》での 収録アドレス	西夏文字 [AA 研コード]	=	西夏文字 [AA 研コード]	+	西夏文字 [AA 研コード]
------------------	-------------------	---	-------------------	---	-------------------

の形、以下何文字とあれば省略せず、その都度入力した。この形式の、ア=ウ+イにあたる箇所の後に、さらに説明を加えている場合もある。それは以下の通り。

𐵒 平 われわれはこれを「平声」と解釈しておく。

𐵑 上 この文字の本来の意味は<長い>である。しかしまた「上声」の「上」の文字でもある。習慣に従い、われわれはこれを「上声」と解釈しておく。

𪛗	重	われわれはこれを「重音」と解釈しておく。
𪛘	清	われわれはこれを「清音」と解釈しておく。
𪛙	濁	われわれはこれを「濁音」と解釈しておく。
𪛚	合	「合わせる」
𪛛	発音	「発音する」
𪛜	思	この文字の本来の意味は＜思う＞である。しかし自分の母国語の発音に対し「思う」はどうだろう。「似せる」などの意味を持つのか、あるいはそもそこの文字ではないのか、今のところわからない。

その他、これに類すると思われるものもある。

𪛝	淡	平声20ページA面5行2番目の文字の反切として使用されている。「淡音」と解釈できるかもしれないが、この1箇所だけなので、今回われわれは文字としてとらえておく。
𪛞	濃	平声20ページA面6行1番目の文字の反切として使用されている。「濃音」と解釈できるかもしれないが、この1箇所だけなので、今回われわれは文字としてとらえておく。
𪛟	破裂	平26ページB面1行1番目の文字の反切として使用されている。「破裂音」と解釈できるかもしれないが、この1箇所だけなので、今回われわれは文字としてとらえておく。

なお、欠落などで音韻の反切が不明な箇所も、参考までに現在われわれが分かる限りの推定音を、略式ではあるがローマ字で付しておいた。

さて、《文海》をもとに、どの西夏文字がお互いに、どんな場面あるいはどんな状況で絡み合っているかを明らかにすることは、西夏文字の成り立ちを字形と音声の両方から知る上での重要な手がかりとなる。われわれが蓄積したデータそのものと、それをAA研コードの順に並べ替えたものの両方を、ここに「電腦処理 西夏文献《文海》反切法解析」として提示することによって、それに少しでも応えられれば幸いである。

われわれが常に本研究所のAA研コードを標準として合わせることには、いささか自己嫌悪を感じない訳でもないが、これまでのわれわれがたどって来た道のりを思うならば、それもまた目をつぶっていただけるだろう。われわれには、その研究の深化・発展の順を成果の順に従って記すならば、

- ①西夏6千文字の作製 『コンピューターによる西夏文字の研究に向けて』1996
《同音》《文海》との対照表を持っているソフロノフ教授の『西夏語文法』をベースに、《番漢合時掌中珠》の情報がもられた西田龍雄教授の『西夏語の研究』を補足して作製し、作製順にAA研コードを割り当てる。
- ②《西夏文雑字》研究 『電腦処理 西夏文雑字研究』1997
西夏語の単語を並べた項目字典であるこの《西夏文雑字》を使い、個々の西夏文字に関する、音声と意味の推定を行う。AA研コード順にも並べ替えておく。同時に、第一次資料による若干の西夏文字字形の修正を行う。
- ③西夏文字の比較・対照研究 『電腦処理 西夏文字諸解対照表(稿)』1998
AA研コード、李範文教授の『夏漢字典』、ソフロノフ教授の『西夏語文法』、西田龍雄教授の『西夏語の研究』、史金波教授らの『文海研究』、李範文教授の『同音研究』の対照表を作製し、それぞれの研究者による個々の西夏文字に関する研究を、1本にまとめる。
- ④《文海宝韻》研究 『電腦処理《文海宝韻》研究』2000(本書と同時出版)
西夏文字の見出し語に対する、西夏文字による字形の反切、および意味の解説を記したこの《文海宝韻》を使い、個々の西夏文字に関する字形の整理と意味の推定を行う。AA研コード順にも並べ替えておく。第一次資料ではあるが写本であるため、誤字や不明瞭な文字が多く、残念ながら西夏文字字形の修正には役に立たなかった。
- ⑤西夏文字の字素分析 『電腦処理 西夏文字字素分析』2000(本書と同時出版)
これまで作製した西夏文字すべてを、字素(文字の字形の最小単位)で分析する。この整理もAA研コード順に従い、字素ごとのリストも作製する。
- ⑥《文海》の反切法研究 『電腦処理 西夏文献《文海》反切法解析』2000(本書)
《文海》における西夏文字の見出し語に対する、西夏文字による字形の反切、および音韻の反切をデータ化し、AA研コード順に並べ替え、個々の文字に関する字形の整理と音韻の整理を行う。同時に西夏文字字形の大幅な修正を行う。

などの発表済の諸研究と、その過程で生じる未発表の研究がある。

実は驚くことに、これらの研究で一貫してわれわれが守ってきたものは、唯一A A研コードだけなのである。個々の西夏文字が持つ意味は、その解釈に全くの個人差が生じてくるのは、他のどの言語も同様、しょうがないことである。また個々の西夏文字が持つ音韻に関する情報も、今回我々の行った《文海》の研究は、西夏文字の西夏文字による反切を解析したものであるし、史金波教授の《文海宝韻》の研究でさえも、積極的な漢字音での推定が為されてはいるものの、推定の域を出ないものもある。個々の西夏文字が持つ字形に至っては、西夏文献ごとに字形が違う、字画が多いゆえの研究者の書き写し間違い、などなどもっと当てにならない。これもダメ、あれもダメなら、ここはひとまずA A研コードに寄せて置いて、今後の研究の進展を待とう、そして様々なデータの蓄積と公開こそが、今後の西夏語研究の一助をなるのではないかとわれわれは考えているのである。

上記のような趣旨に基づいた今回の発表は、よってデータのみであって、詳しい分析は目下進行中であるが、ここに途中経過を少しご紹介しておこう。

字形の反切、音韻の反切、ともに言えることなのだが、次のいくつかのタイプに分類することができそうだ。

タイプ1 お互いに引用し合う。

$A=B+x$

$B=A+y$

AとBを「兄弟の関係」と呼んでおこう。

タイプ2 親字が共通。

$A>C$

$B>C$

AとBをやはり「兄弟の関係」と呼んでおこう。

タイプ3 親字がある。

$A>B$

AとBを「親子の関係」と呼んでおこう。

タイプ4 親字が2つある。

$A>B$

$A>C$

AとBを「親子の関係」
AとCを「親子の関係」
BとCを「兄弟の関係」と呼んでおこう。

と、このようなタイプ分けを発展させて、電算機上に系統樹を表現できたら、一層興味深い研究が期待されるであろうと考えている。

2000年1月

中嶋 幹起

今井 健二

高橋まり代